

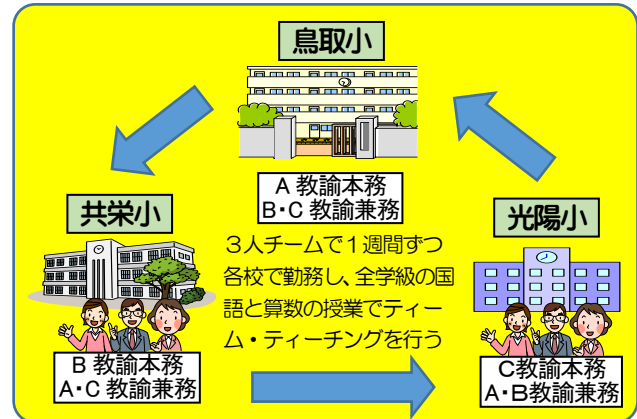
- 1 報告地区 : 釧路市地区
 2 事例報告学校名 : 釧路市立鳥取小学校
 3 報告者 : 校長 本川 敬一
 4 キーワード : 「授業改善推進チーム」を活用した授業改善の取組



1 はじめに

今、子どもたちの学力向上、学校力の向上が求められ、そのためには教員個々の授業力向上が必要不可欠であります。本校は平成28年度より、市内の共栄小学校、光陽小学校とともに、北海道教育委員会の指定事業「授業改善推進チーム活用事業」を受け、新たな視点から授業改善に取り組んでいます。

授業改善を行う上では、どの学校でも校内研修をはじめ、指導主事要請訪問、メンター研修、各種研修講座など多様な方法を通して取り組んでいるところでありますが、本校でも、校内研修や指導主事要請訪問等と並んで有効に活用し、全学級の授業改善、全教師の授業力向上に取り組んでおります。

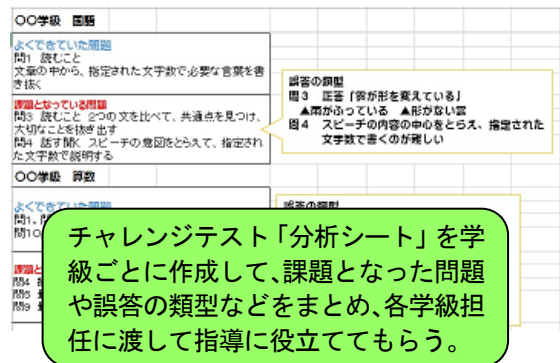


2 「授業改善推進チーム活用事業」の概要

この事業は、3校からそれぞれ授業改善推進員の教諭を1名ずつ選出し、その3人で「チーム」を組み、1週間ずつ各校に滞在し、全学級の国語と算数でチーム・ティーチングを行うものです。教材研究の効率化や指導の一貫性のほか、推進教員の負担軽減等を考慮し、3人の推進員はそれぞれ1・2年生担当、3・4年生担当、5・6年生担当と担当学年を固定し、どの学校に行っても同じ学年に入るようなシステムで実施しております。

(1) 業務内容

- ①本務校及び兼務校教員とのチーム・ティーチング
 - ・推進チームは、学年を分担して国語及び算数のチーム・ティーチングの授業を行い本務校及び兼務校の全学級の授業改善を図る。
- ②本務校及び兼務校の全教職員との協働による授業改善
 - ・釧路市教育委員会発行の「授業改善の観点チェック表」や各種学力調査、ほっかいどうチャレンジテストの結果等をもとに学校全体の課題を全教職員と共有し、改善に向けた取組を展開する。
- ③学力向上に向けた授業以外の取組
 - ・校内研修において、日常の授業改善に役立つ資料の提供を行い、本務校及び兼務校の教職員と協議する。さらに推進チームだよりの発行を通して情報提供する。
- ④諸会議等
 - ・全道研修会に参加するほか、釧路市教育委員会が設定する定例報告会（毎月1回実施 教育局・市教委・推進教員3名・3校の校長が参加）に参加し、情報交流を図るほか、マネジメントシートを活用して、進捗状況の確認を行う。



(2) 推進教員活用例

【授業場面】

- ・児童への意図的な支援～机間指導での支援、ヒントコーナーの担当など
- ・全体指導を交代～導入や終末場面での一斉指導 をT1と入れ替わる
- ・ICT機器の操作、教材教具の提示
- ・分担したグループへの指導、習熟度別グループの担当
- ・児童役として児童の考えを深めるなど、T1との掛け合いで児童の思考を活性化させる

【授業場面以外】

- ・担任と協議した教材研究や指導案作成
- ・教材作成（パワーポイントなど）
- ・資料提供や学習プリントの作成
- ・若手教員に対する提案授業や授業に関する助言
- ・推進員日より「TEAMだより」の発行
- ・テストの丸付けや結果の分析



これ以外にも授業改善や指導力向上、担任教師の日常業務の軽減に関わる様々な取組を行っています。

3 おわりに

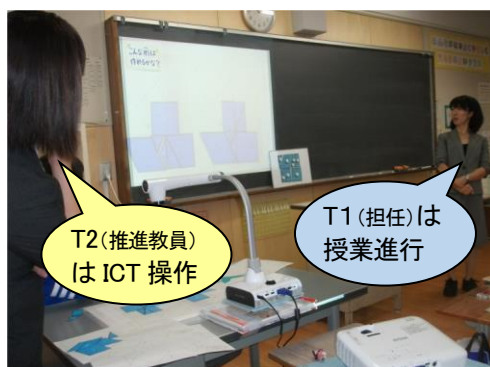
この事業は、直接各学級にティーム・ティーチングとして入り、一緒に授業を進めることによって、授業改善には確実に成果が上がる方策の一つであります。また、他校の優れた実践を、推進教員ごとに本務校で発行しているチームだよりなどを通して、広く情報提供されることも有益な情報源となります。

さらに、推進教員がT1となる場面では、学級担任は客観的に自分の学級の児童の様子を観察することができます。

しかし、推進教員が1週間ごとに巡回するため、取組の継続性や、(特に) 兼務校の教員との関係づくりの上で困難をきたすこともあります。

また、学級担任や推進教員の年齢や経験、考え方の相違から、必ずしも、どの学級でも同じように関わることが難しい一面もあります。各担任教師との打合せの時間確保も課題です。

この事業を通して授業改善を確実に進めるためには、推進教員3名のチームワークが大切であります。そして、本務校はもとより兼務校の推進教員も肩肘張らずにどの学級にも入れるよう、受け入れる側が受容的な風土をつくるのが大切です。何よりも推進教員と学級担任とのコミュニケーションが成功のキーポイントだと思います。それらが機能しやすくなるよう、校長・教頭・教務主任等による全面的なバックアップが重要だと肝に銘じています。



Teamだより

福岡市立鳥取小学校
授業改善推進チーム
平成29年11月9日
№14文責 小久保

「児童の言葉で授業をつくること」を意識した授業

今回は、昭和41年・渡部先生の4年算数「計算のやくそくを調べよう」において、教師側である程度導きながらも、児童の言葉を使っての授業づくりを心がけることで、主体的な学びに結びついていた授業を紹介いたします。

机間指導	指名計画
机間指導の際は、どの児童の考えを、どのタイミングで取り上げて、どうつなげていくか、先生は頭の中で児童の答えを類型化して、考えていました。ポイントは、いつも、最初と2番目、そして、最後に指名する子は必ず決めておくそうです。	指名計画は、全体交流が始まると、出して欲しいその場面でスバリその児童を指名します。「〇〇さん、ここであなたはどう計算しましたか?」えを類型化して、考えていました。「どうして6+2にするの?〇〇くん」ポイントは、いつも、最初と2番目、そして、最後に指名する子は必ず決めておくそうです。
指名する順序だけでなく、「どの場面で誰を指名すると、児童の話し合いがより深まるか」を考慮しています。	
テンポ 児童のつぶやきを拾い、考えを深めたり、児童の言葉で授業を作ること心がけると、時間がかなり、まとめや振り返りの時間が少なくなりがちですが、授業のテンポが非常に良く、指名計画が的確であるので、きちんとその場面にすべでの活動を行うことができ、「すごい」の一音でした。先生は、いつも「子どもの言葉で授業を作る」というテーマで毎日の授業に取り組んでいるそうです。その意識の高さも見ていっています。	